

長江の業績と生涯をたどる

■生田長江シンポジウム



生田長江（1882年生まれ、貝原出身）左は長女まり子

日野町出身の文芸評論家・翻訳家、生田長江。その業績については広報ひの8月号でも紹介しましたが、長江が残した足跡を検証し、後世に伝えていこうと、長江の研究者らによる「真摯のひと、光彩を放つ」生田長江シンポジウム（鳥取県生田長江顕彰事業実行委員会主催）が、10月29日、町文化センターで開かれました。

近代日本の文化を作ったひとりである長江

シンポジウムでは、基調講演として、谷崎昭男さんによる基調講演が行われました。谷崎さんは相模女子大学教授。生田長江の門人であった作家、佐藤春夫の全集編集委員をつとめたほか、評論家としても活躍しています。

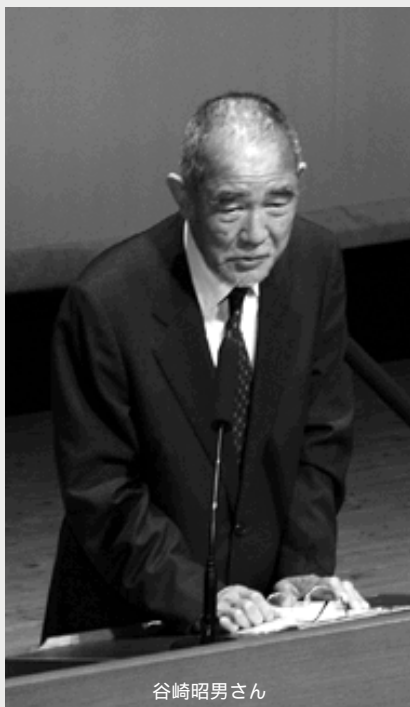
基調講演（要旨）

長江は翻訳を多く手がけ、小説や戯曲を書くなど、文芸

だけではなく、文明批評など広い範囲にわたって評論活動をしてきた人です。

しかし、長江の仕事全体を見渡して私が一番だと思っは、そうした評論活動よりも、むしろ翻訳ではないかと思ます。それは、分量だけではなく、その質においても大変すばらしいと改めて感じています。

長江が残した翻訳の中でもっとも分量としても多いのはドイツの哲学者ニーチェの作品。この翻訳がどれほど近



谷崎昭男さん

代の日本の文化発展に役立つたかを考えるとき、長江は近代日本の文化を作った恩人のひとりであったと言わなければならぬだろうと思います。

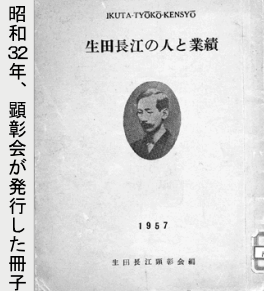
長江の翻訳が優れている理由、それは長江の人物によるところが大きいと思います。長江は才気あふれる人。弁舌さわやかで演説が見事だったと伝えられています。原文の粹を出ることなくその才能を存分に生かしたということが、翻訳を見事なものにしたと私は考えています。

今回、私もこの顕彰運動の一端を担わせていただき、ありがたく思っています。この運動が今後どうなっていくかが気になります。長江のことを知ろうとしても作品を読むテキストがないという状況にも気をもんでいましたが、最近長江の作品集が一冊発行され、そうした動きが出てきたことをうれしく思っています。

基調講演の後、生田長江の会の河中信孝さん（日吉津村）による、昭和31年ごろ町内で始まった長江の顕彰運動についての解説がありました。

長江が亡くなったのは昭和11年（1936年）。その後、貝原の遠藤一夫さんが中心になって、まず公民館報に2度ほど長江についての文章を書かれた。当時それほど反響はなかったが、その後昭和31年ごろ新聞・ラジオで取り上げられたのをきっかけに長江の顕彰運動が盛り上がり、生田長江顕彰会ができました。当時の町長や県知事、地元の名士らが名を連ね、顕彰活動が始まりました。

また、東京にも顕彰会ができ、門人の佐藤春夫さん、伊福部隆彦さんらが中心となって活動しました。



昭和32年、顕彰会が発行した冊子

顕彰会では、著名人の色紙を一人5枚ずつ、計600枚作り、県内各所で即売会を開いて活動資金にあてたそうです。根雨では当時の映画館・ことぶき館で行われたということです。

活動の中心は、延暦寺に顕彰碑を建て、長江の作品を出版すること。そのほか継続的な勉強会もあったようですが、遠藤さんは、「記念碑を立てるだけではなく、郷土の人々の心の中に記念碑を打ち立てなければならぬ」と書いています。この言葉には私も非常に感銘を受けました。



河中信孝さん

長江の人物・業績を討論

シンポジウムの最後には、文芸史家の竹内道夫さんの司会によるパネルディスカッション（公開討論）が行われ、谷崎昭男さん、河中信孝さんをパネリストに迎えて長江の魅力や業績などが語り合われました。

パネルディスカッション（要旨）

谷崎 長江の翻訳は、文学の作品たりうる一つの重さを持つており、読む人を動かす力を蓄えていると思います。

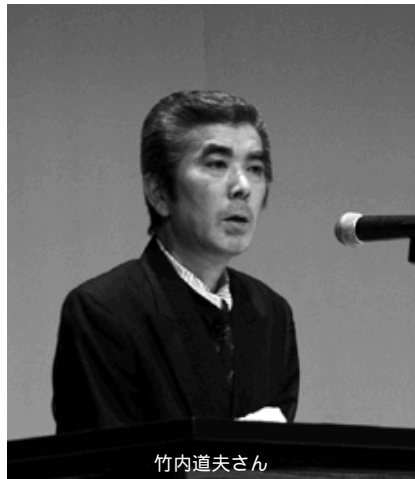
明治の女性解放運動のさきがけとなった『青鞥』の創刊に際して、その誌名を長江が付けています。それは、ロンドンでブルーストッキングと呼ばれていた知的な女性たちの中で、日本では「紺足袋党」と訳されていたのを長江が青鞥という呼び方に変えたというもの。青鞥が成功した理由はいろいろありますが、青鞥という名前の清新さがひとつにあると考えています。

そんな風に、言葉には人を動かす力があります。

また、長江の翻訳から大きな影響を受けたのは詩人の萩原朔太郎で、長江のニーチェの訳詩から感化を受け、「漂泊者の歌」という詩の中に、長江訳のニーチェの詩の一部を取り入れています。

仏教、洗礼、そして創作変化に富んだ一生

竹内 河中さん、長江の人柄について解説をお願いします。河中 長江は、かなり一貫した筋を通して生涯を終えた人だったという気がしています。どの局面を見ても、貧しい人たち、虐げられた人たちに對して、何をどうしていけばいいのかを一生考え続けた真面目な人です。



竹内道夫さん

目な人であったと思います。

長江は敬けんな仏教徒の家庭に生まれ育ち、若くしてキリスト教の洗礼を受け、また社会主義運動に関心を寄せ、文芸評論、創作などの文筆活動を活発にやり、最後は『釈尊』執筆に全精力を傾けた、非常に変化に富んだ一生を送りました。

人柄としては、非常にきちりしたスタイリストで、若いころはカイゼルひげをピンと生やしていましたが、ユーモア好きな一面もあり、ユーモアセンスがない人間はつまらんと考えていたようです。

江府町出身の妻・藤尾とは、夫婦というより兄弟という感じだと、生田春月への手紙にも書いています。また、新たな才能を持つひとを見つけて世に出すという能力もあり、多くの後輩・弟子を育てていた人です。

ニーチェとの関わり

竹内 長江はなぜ全集を出版するほどニーチェに惹かれたのでしょうか。

谷崎 長江初のニーチェの翻訳である『ツアラトウストラ』